

制作概要

呼吸をするが如く、言葉を口から発するが如く、手で描く。その行為は既に自然発生なものであり、ましてや直観的衝動で描く行為は、どうしてそうしたのかと客観的に説明するのは大変難しい。他者がその行為を観察する方がより明確に説明できるかもしれない。鏡をみている「私」と他者が観ている私が違うのと同じように。

心理学者河合隼雄氏は著書「イメージの心理学」*でこう述べる。～絵画・粘土・箱庭、あるいは身体活動によって、自分の内的世界を自由に表現してみようとするときがある。このときは、とにかくできる限り自由に、ということをおおに表現活動を行うのだが、作っているうちに自分でも思いがけない表現が生じてきたり、作ったイメージに刺戟されて、思いがけぬ発展や変更が生じたり、いったいなぜそうしたのかわけのわからぬうちに作品ができあがり、後で考えてみると、内界の表現として思い当たるところがある、という場合がある。これを外在化されたイメージと呼んでおく。～

会場である Space31 では、空間としてのテーマを「THE KAGAMI」とした。「鏡」とスペイン語「Ami（私にとって）」との言葉遊びである。

内容は、その外在化されたイメージの実験である。役者で友人の磯崎たまな氏に「鏡」という詩を作ってもらい、そこから生まれるそれぞれの「私」のもつ新しいイメージと既に生み出されたイメージとの融合で、空間をそのまた外在化されたイメージの結晶である絵画で構成し、その空間から発展したイメージで寸劇「梅子のはなし/磯崎たまな・作」を鑑賞する場ともなった。

即興音楽のような作り方や小劇場のような空間だったかもしれない。直観のまま進めた結果、このような実験作品となった。

作る側の「私」、演じる側の「私」、観る側の「私」が持つ「鏡」のイメージはそれぞれで違うと思うが、同じ時間・空間を共有したことは間違いない事実である。

また、そのイメージたちが外的現実とどの程度一致するのかで「分かる」「分からない」という感想がうまれると思うが、観る側にもそれぞれ自身の「私」のイメージという主観性を求めた作品なので、芸術的には残念ながらその辺りはあまり重要ではない。

*イメージの心理学 河合隼雄著 青土社 1991
p.26

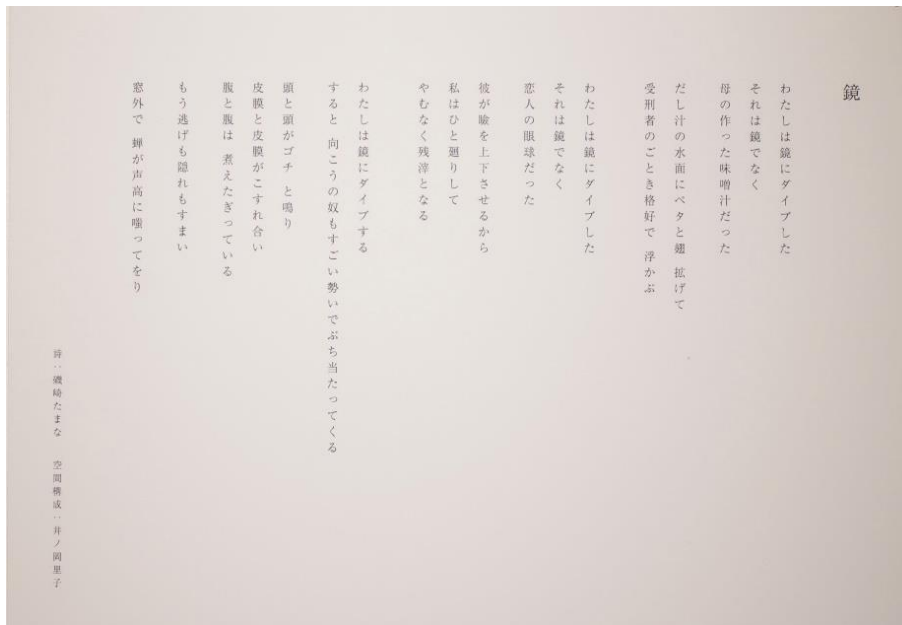
井ノ岡 里子

THE KAGAMI

Space31 (神戸)

2017. 11. 1～11. 12

井ノ岡：『 THE KAG AMI 』



磯崎たまな氏による詩と寸劇「梅子のはなし」踊り：平原るり



鏡Ⅰ「泳」の制作過程 漆喰を感覚のまま手で描く。

井ノ岡里子 泳 2015年 700×1000mm

木製パネル・漆喰・パステル

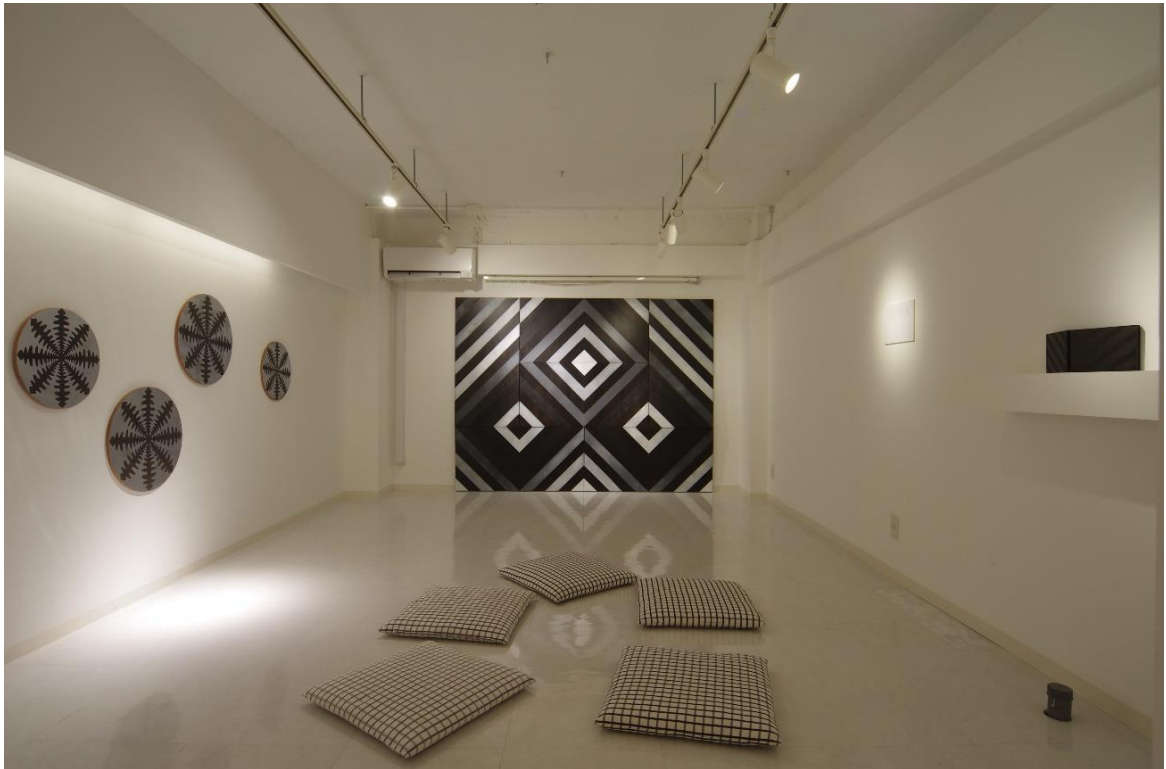


鏡Ⅱ「癒着」の制作過程 切り紙からの展開。

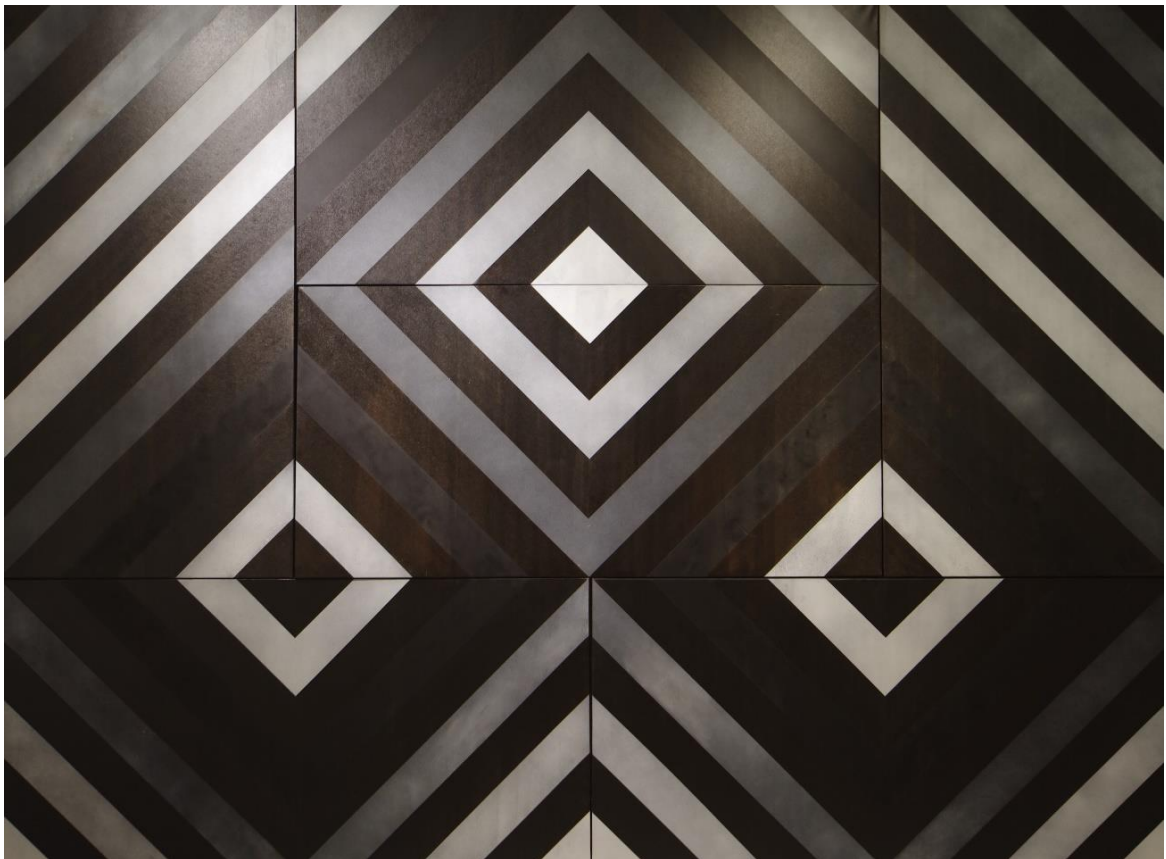
井ノ岡里子 癒着 2017年 柿渋・アクリル・板・油性塗料

鏡Ⅲ「鏡」の制作過程 錯視からの展開。





THE KAGAMI 2017年 Space31 (神戸)



井ノ岡里子 鏡 2017年 1800×2400mm 木製パネル・雲肌麻紙・墨・アクリル・柿渋・木炭